夏季のねぎの管理について

1 夏に弱いねぎ

生育適温が20℃前後で多湿に弱いねぎにとって、梅雨時期の高温多湿の条件は過酷な環境です。生育が停滞したり、時には「ねぎが消えた」と表現されるような大きなダメージにつながることがあります。

湿害を防ぐため、ほ場の排水対策が万全かどうか見直しましょう。あらかじめ雑草対策を徹底し、雑草との競合や除草作業による損傷を防ぎましょう。また、管理作業の際に根や茎を傷つけないよう注意してください。

2 生育不良の原因をつきとめましょう

生育不良がみられる場合には、株を抜いて観察しましょう。発症後は有効な対策がない場合もありますが、今後の対策を考えるためにも原因の把握につとめましょう。

○軟腐病かも？

地際部付近が水浸状にしっとりと腐り、特有の悪臭を放つのが特徴です。根の周辺や葉の上で増殖した病原菌が、害虫の食害痕や風雨や管理作業でできた傷口、気孔から侵入して、植物体内で増殖し発病します。

○白絹病かも？

地際部に白いカビの菌糸と茶色の粟粒のような菌核をつくるのが特徴です。未熟な有機物を施用すると発病が助長されます。

○ネダニ類かも？

根や地中の盤茎部が食べられてしまうため、被害を受けた株は簡単に引き抜くことができます。被害部には0・7㎜ほどの小さなダニがたくさん見られます。萎凋病や軟腐病などの土壌病害と併発することもあります。

○ネギネクロバネキノコバエかも？

幼虫が集団で地中の盤茎部を食害します。秋になり涼しくなると虫が増えてくるため、被害が本格化します。また、土寄せ作業に伴って防除薬剤が虫のいる部位に届きにくくなるので、早目に対処する必要があります。発生地域が拡大しているため注意してください。

秋冬ブロッコリー病害対策について

深谷市の秋冬ブロッコリーは、春に収穫されるブロッコリーよりも大規模に生産されています。しかし、秋冬ブロッコリーは作型が多く、栽培期間が高温期から低温期にかかり、気候の影響を受けやすい品目でもあります。そのため、病害の発生が多く、症状は様々で、対策がとても難しくなります。病徴や対策について、しっかりと理解して適切な防除を心掛けましょう。

1 注意したい病害と対策

(1) 花蕾腐敗症

花蕾腐敗症は、細菌が病原となるものです。花蕾が腐り、腐敗臭がするのが特徴です（写真1）。まとまった降雨があり、高温期に発生しやすくなります。前年に発病したほ場の場合、再び被害が出る可能性が高くなります。また、症状が悪化すると隣接株へも被害が出る可能性があるので注意しましょう。

対策については、①被害があったほ場では作らない、②銅剤散布を検討しましょう。銅剤は、成分が触れたところにのみ効果が出るものがほとんどです。散布の際には、植物体全体にかかるように意識しましょう。

(2) 黒すす病

黒すす病は、糸状菌（カビ）が原因になる病気で、25℃前後になると発生しやすくなります。主な症状として、丸型の斑点が生じ（写真2）、下葉から上位葉、花蕾、上位葉、隣接株にも広がります。また、葉表に病斑が見えなくても、裏に病斑が出ている場合があるので、気づかないうちに感染が拡大する可能性があります。

黒すす病の対策としては、定植後の早い段階から定期的な防除を行うようにしましょう。また、育苗時にも感染することがあるので、一度は防除するようにしましょう。

（写真1）花蕾腐敗症

（写真2）黒すす病